

# English Garden 第75話

"The schemer falls into the pit which he digs for another."

Conan Doyle

「他人を陥れようとして穴を掘る者は、みずからこれに落ちる」

コナン・ドイル

前回に続き短編集『シャーロック・ホームズの冒険』の中から、特に有名な "The Speckled Band" (『まだらの紐』) を取り上げます。この作品はドイルによる自選のリスト(1927年)でも、アメリカのシャーロック・ホームズファンクラブによるベスト作品の選定でも1位に選ばれています(ちなみに自選の2位は『赤毛組合』)。この物語はご存知の方が多いと思いますので、簡単に概要だけ書きます。

双子の姉妹の継父であるロイロット博士は、隣の部屋から空気孔を使って毒蛇を操り、結婚間近な姉妹を殺害した。2年後、結婚することになった妹のヘレンをも同じように殺そうとしたところ、ホームズの機転で逆にその蛇に噛まれて命を落とした。娘が結婚すれば、姉妹の母親から譲り受けた財産を分け与えなければならないからだった

ヘレンの部屋で夜を過ごしたホームズが、天井の空気孔から下げられた綱を伝って下りてきた毒蛇(まだらの紐)をステッキで打ち据えたところ、蛇は孔から戻って操っていたロイロットを襲いました。表題の言葉は、叫び声を聞いて隣の部屋に駆け込んだホームズが、ロイロットの死んでいるのを見て言ったものです。この全文は次の通りです。

Violence does, in truth, recoil upon the violent, and the schemer falls into the pit which he digs for another.  
(暴力を振るう者には暴力がはねかえり、他人を陥れようとして穴を掘る者は、みずからこれに落ちるのだ)

この言葉は次のような聖句をふまえています。「穴を掘る者はそれに落ち込み、石垣をくずす者はへびに噛まれる」(旧約聖書・伝道の書10章8節)

この作品は人気が高けり多くのシャーロック・ホームズの研究対象となり、この毒蛇に関してさまざまな意見が記録されています。そのいくつかをご紹介します。

原文ではホームズがこの蛇をインド産のもっとも危険な "swamp adder" と呼んでおり、概ね翻訳では「沼毒蛇」と訳されていますが、この名前の蛇は存在せず、実在するものではコブラがいちばん近いということです。コブラはぐっと鎌首をもたげるので、インドの蛇使いがよく使います。ほんの数分で命にかかわるほどの即効性の毒がありますが、噛まれたロイロットを10秒で絶命させるような毒蛇はいないそうです。そこで、彼は心臓麻痺で死んだのだらうという説も出ています。たしかに姉妹は「まだらの紐...」とつぶやいて次第に弱って息を引き取っていますので、この二つの場面は矛盾することになります。

次は、蛇は綱を伝って下りることはできるとしても、絶対に這い上がることはできないという指摘で、この点に関してはまだ満足のいく説明はありません。

そこで、ロイロットが金庫の中で飼っていたというこのまだらの紐が、もし蛇でなかったらという大要次のような奇抜な推理もあります。「それは、メキシコの毒トカゲとインドのコブラをかけ合わせてロイロット博士が育てた恐るべき雑種で、トカゲの知恵と俊敏さ、蛇の毒性を兼ね備えたものだったろう。その結果、どんな相手も瞬時に殺すことができ、足と爪で容易に綱を上がり下りすることもできただろう」

こうした説を頭において作品を読むのも、また一興でしょう。

参考文献:

『詳注版シャーロック・ホームズ全集2』ちくま文庫 1997年刊

『シャーロック・ホームズの冒険』シャーロック・ホームズ全集3 河出書房新社 1998年刊

